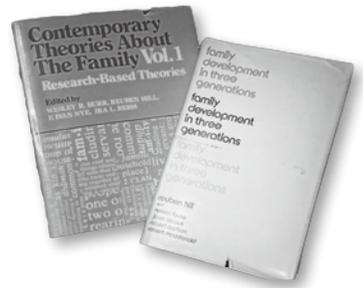


ルーベン・ヒル

家族変動のメゾ理論を目指した巨匠



目黒依子

上智大学 名誉教授

ヒル (Reuben L. Hill) の貢献は、学究として、社会科学としての家族社会学の理論構築を目指すリーダーとして、また次世代研究者の教育者として計り知れない。

ヒルは1935年にユタ州立大学で社会学の学士号を、ウィスコンシン大学で1936年に哲学の修士号を、1938年に博士号を取得した。1957年にミネソタ大学教授となり、大学の家族研究センター長として1983年の退職まで、同センターを国内外での研究・教育活動の拠点とした。それは家族変動の実証に基づく理論の構築を追究し続けた活動だったといえる。また、家族理論・調査研究における最初のErnest W. Burgess Award及び社会問題研究におけるHelen DeRoy Awardの受賞者でもある。

退職後も立ち止まることなく、日本学術振興会の招きで来日し、日本社会学会年次大会での特別講演では家族変動と社会変動のマクロ・ミクロ理論について、日米の社会学者に挑戦的に問いかけた。さらに、家族問題研究会での講演や、理論構築に関する「家族とライフコース」研究会を中心とするセミナーをはじめ、各地で講演・指導などを行い、日本の社会学を応援する熱意に溢れる滞在となった。心臓麻痺で倒れたのは、1985年9月21日のこと。このとき彼は、オスロ大学の社会学・心理学研究所のフルブライト客員教授だった。

ヒルの家族社会学への貢献を網羅するには筆者の能力不足だが、以下のようなロール・モデルといえるのではないか。先ず、データ収集の段階から大量の資料を指標に基づいて分類したこと。これには論理的にデータを整理するという緻密な作業を要する。第2は、アメリカ社会が直面した社会的課題解決に繋がることを目的とする研究に社会学的視点と方法で取り組み、事実に基づく政策提言を可能にしたこと。第3は、厳しい求道者であると同時に、他の研究者、特に若い研究者にインパクトを与えた思考と行動。彼の活動した時代のキーワードとなるような概念やミニ命題を提供しつつ、家族変動の理論を追究し続け、そのメゾ理論を確立しようとする信念をもっていったこと。

その成果をWesley R. Burr et al. (1979) に見ることが出来る。準備期間は5年以上に及び、49もの大学から協力を得て、「家族変動」、「家族の相互作用」、「家族と問題」というジャンルの理論家たちを執筆陣に迎えた、669ページに及ぶ大プロジェクトである。1950年以前の家族「理論」からの脱却を目指し、実証に基づく理論構築というメゾ理論の構築プロセスを編集方針として、22本の論文で構成されている。ヒル自身は、David M. Kleinと共著で「家族の問題解決効果の決定要因」と題する論文を執筆している。「家族問題」の概念化から家族問題解決の部分理論まで考察する、頭を絞るような作業が求められる力仕事だ。

ヒルの業績で注目を浴びた最初の研究(『Families Under Stress』, 1949) は、1944年後半からの戦線から復員する兵士を対象とする、「召集による離別と復員後の留守家族との再適応に関する調査分析」である。その後の『Family Development in Three Generations』(1970) は1年間で300家族のインタビューに挑み、家族の方針決定や行動パターンに関する三世代間の変化と社会変動との相互作用の命題化につながるメゾ理論化への礎となった。さらに、『Middletown Families: Fifty Years of Change and Continuity』(1982) は、Lynd夫妻 (Robert and Helen) によるコミュニティの地域社会調査 (1924, 1925, 1935) から50年後に同じ方法で再調査 (1976~1978) したもので、アメリカにおけるコミュニティの変化の分析を目的とした反復調査である。

これら社会の変動と家族の変動を捉える調査の方法は異なるが、いずれも膨大な時間ときめ細かい作業を要するチーム研究である。そして、家族のありようは時代とともに変化しつつも、アメリカにおける家族という価値の継続性を見極める設定は、ヒルの調査研究の特徴だといえる。

文献

Wesley R. Burr, Reuben Hill, F. Ivan Nye and Ira L. Reiss (eds.), 1979, "Contemporary Theories about the Family", New York: The Free Press.



Column
調査の
達人

森岡清美

調査デザインの吟味と展開

石原邦雄

東京都立大学 名誉教授

宗 教教団研究と家族研究の双方において、実証研究に基づく数多くの著作を発表してきた森岡清美を、日本を代表する社会学者の一人に加えることに異論はないだろう。本稿では上記2つの領域のうち、より体系化や理論指向の強さが特色となる家族研究領域に注目しておこう。この領域では、本人が「交通整理」と称していたような、欧米の先行的研究の徹底したレビューに基づく理論的位置づけを明確にした計量的な調査研究がなされていることが特徴である。そして、そうした研究上の構えも含めて、米国のR.ヒルから多大な影響を受けていることも、よく知られている。ここでは調査デザインという面から、「勝沼調査」と「FLC静岡調査」という関連する二つを取り上げておこう。

まず「勝沼調査」は、家族周期の段階移行に伴う家族役割の実態と意識の変化が中心課題とされた。山梨県の旧勝沼町の主要5地区において、2世代夫婦の揃う完全直系家族形態で、かつ両世代に婚養子を含まない、111世帯を抽出し、1966年に第1回、そして1972年に第2回調査が実施されて、その結果の一部が彼の代表作『家族周期論』（森岡、1973）に収められたのである。

この調査デザインは、R.ヒルがミネソタ州で行った3世代比較法（Hill, 1970）に触発されたものである。ただし、日本の農村家族の典型である直系家族を対象とする場合に、既婚の3世代を含む世帯を抽出するのは極めて限られたケースになってしまう。そこで、2世代夫婦の揃う形態にとどめたかわりに、跡継ぎ息子の出生年を1921～35年に限定することによって、家族の世代間比較が時代の変化を反映するものになることを狙った。以後、1979, 81, 92, 97年と長期にわたる反復調査が実施され、調査実習の学生にとどまらず、門下生たちの研鑽のフィールドともなったのである（堤, 2009）。

森岡は、核家族論を方法的基礎にした上で、家族周期論と歴史的変動論とを組み合わせることによって、非西欧的な歴史的・文化的な背景を持って近代的変化を遂げる日本の家族を体系的に捉える枠組みを確

立した代表者といえる。しかも、彼はそこに留まるのではなく、家族の個人化・多様化といわれるその後の新たな問題状況に対して、新しく登場してきたライフコース論にいち早く着目した。それにより、個人を分析単位とする新しいパラダイムの可能性を示すとともに、FLC研究会と称された共同研究を立ち上げ、家族研究の一つの新しい流れを作り出したのである。

日米比較の視点も取り入れた「FLC静岡調査」は、出生コーホートと世代比較を組み合わせる形で勝沼調査を発展させた調査デザインであると位置づけられる。サンプリングは、静岡市内の特徴の異なる6つの小学校区から、ランダムに1918～37年生まれの有配偶男子世帯主を中心に607名を抽出して、1982年に彼ら（G2世代）とその妻を対象とした訪問面接法により336世帯の調査を完了した。翌年にはその親世代（G2）113ケース、さらに子世代（G3）108ケースを抽出して、第2次調査を主にG2世代の戦争体験を含むライフコース上の出来事経験とその影響、および3世代間の家族親族関係の推移を捉えるとともに、制約付きながら日米比較も試みられた。こうして、計20名の研究者が共同執筆した日本におけるライフコース研究のマイルストーンとなるモノグラフ（森岡・青井, 1987）がまとめられたのである。

さらにその後、このプロジェクトから裾野を広げ育った人材によって、日本家族社会学会としての全国家族調査（NFRJ）が継続実施されることにつながった意義も極めて大きいといえよう。

文献

- Hill, Reuben, 1970, *Family Development in Three Generations*, Cambridge: Schenkman.
- 堤マサエ, 2009, 『日本農村家族の持続と変動— 基層文化を探る社会学的研究』学文社.
- 森岡清美, 1973, 『家族周期論』培風館.
- 森岡清美・青井和夫編, 1987, 『現代日本人のライフコース』日本学術振興会.